

ても、足らはぬ勝ちの私の事に候へばする事  
 なす事すべて御氣に叶はずと見え日々責め折鑑  
 せらるゝはまたしも今日此頃は三度の食事すら  
 るくく下されず力と頼む我夫さへ……………

……誰に語りてこの苦しみを分つべき便とても  
 なくたいく一度づ洗濯の水くみにとて谷川  
 へ參るこのみがせめて一日中の樂しみに御座  
 候……………されどいか計り苦しとて一旦出で  
 人に嫁したる身のよしや苦しさのあまり此儘  
 こゝに死すればとて何をか恨み候べき何もく  
 たい宿業とあきらめて覺悟致し居り候……………。

評。句々皆涙、宛然是れ一篇の悲劇。

幼時の家庭 (二等)

丹波 不忸 軒 人

私の家わ代々藩の劍術師範役を務め、今わ亡

い父も維新までわ其役を務めたのであります、し  
 て私わ父の廿八歳、母の十九歳の時で、明治の七年  
 に舊藩邸に産れました。其時家族わ祖父と兩親と  
 三歳の姉とが有りました。何分にも武を以て立ッ  
 て來た家に女子が生れて皆な失望して居る處に、  
 男子の私が生れたのですから、一家内わ勿論、親戚  
 近隣にまで非常に悦んで貰うたそゝです、當時父  
 わ町の戸長を務め、傍ら邸内の道場で子弟に劍術  
 を教授しました。此頃わ可なり世襲の財産もあり  
 ました。私が五六歳の頃には父から種々の談をし  
 て、貰いましたが、殊に毎夜父に手枕をして貰い  
 ながら、楠公父子とか義貞とか義經とか那須の與  
 市とか其他色々人の忠勸談を聞き、之等の人に  
 就いての教訓を受けましたが、これが唯一の樂み  
 で、いつも日の暮れになると寢床に入るのを待ち

兼ねました、今も猶暖い柔かな其手が、耳の上邊に横はッてあるかのよりに感じます、又七八歳の頃から毎日夕方になると、一時間程道場に出て、剣術の稽古をさせられました、何しろ小さな頭を大きい竹刀でボン／＼やられるのですから、それが唯一の苦でありました。右等の教育に依ッて、私の幼心にわ已に士の家に生れたものわ十歳を超えたならば一人前であるから、忠義を盡さねばならぬ、忠義とわ君の身に代り死ぬる事である、忠義をすれば其れで親にも孝行になる、忠義の爲めにわ命わ惜くわない、嗚呼エライナー正行わ、義經わと筒様な考えを持つて居りました。七歳の時小學校に入學をしましたが、其以來私が課業中で最も面白く感じたものは歴史談でありました、高等小學校に在る頃にわ忠を盡すには多くの

方面があると云う事を知りました、して卒業後、歴史や地理を學び、古英雄の事蹟并に古跡等に出逢いますと、甚だしう感情を刺激しますものわ彼の寢床の中の談材になつた人等でありましたが、今も地理と歴史の研究にわ比較的多くの興味を持つて居ります。

父わ私が八九歳の頃に戸長を辭し、後ち數種の實業を營みましたが、遂に悪好の爲めに莫大の損耗を生じ殆んど産を盡しました。或人の勧めに依ッて巡查を奉職しました時に、私にわ弟妹各一人づゝありました。都合によつて姉と私とは親類に預けられる事になり、萬斛の涙を飲み名残を止めて、温かい家庭を離れましたのは恰も十二歳の秋で、爾來十七歳の春まで五ヶ年間に二三の縁家の厄介になり、子供相當の苦辛をしました、此間

に於て自分わ人の眷顧ばかりに依頼するのは男子の爲すべき事でない、自活わ神聖である、獨立(或る範圍)わ立身の基礎で尊重すべきものであると云ふ事を深く感じまして、斷然縁家を去り、専ら他人の間に於て相當なる務めをして自活と修學との資を得ました。其間に蹉跌して止むなく目的を變換しましたが、結局今日でわ小學校の訓導を務めて居ります。(終り)

評。取り出で、ごうさいふ節はなけれど、おち付きたる書き振り、樂しかりし毎夜のお伽話に吾も自ら引き入れらるゝ心地しつ。

幼時の家庭 (三等)

東京 平野ゆき子

小雀の聲を高く聞き、菜の花の黄金いと近く見て、ちらくちらくとふりくる花吹雪、東風ゆるく香を

送りて袂を返すに、胡蝶ゆたかに飛ぶなど、實に春の日の景色眺めて何人か心に邪をかめや。

人の世の春なる幼なき頃の家庭のさまの、しかく樂しき人こそ幸多けれ。嬉しき我が父が學資出して小學校に通はせしめぐみによりて、子といふもの、盡すべき孝道は聞き知れり。さるを今父母の名を汚して、忌むべき我家庭を人に知らしむる我罪を問ひ給ふ、こひねかはくは讀みて其罪の何れにあるかを教に給へ。天真爛漫とか云ひて愛すべき幼時のものかたり、はづかしさを忘れいひいづる我身の上、春ならねども立てめし霞、うすもの帷したらんが如く、かすかにをほる氣なれど、妾には初めより母なし、唯乳母の八重の何となくなつかしう、慕はしうて、片時も傍はなれし事なかりしに、ある冬の夜半なりき、父も祖母も姉も